

学生レポ! 私も 広大です

全ての従業員が志を一つに 小さくとも光るホテルを目指す

私が社長・総支配人を務める東京第一ホテル松山は、愛媛県松山市で有数のシティホテルです。122室の客室と直営レストラン2店舗、宴会場を擁しており、宿泊のみならず結婚式や同窓会などさまざまなシーンでご利用いただいています。過去には、皇族やプロ野球選手などにもお泊りいただきました。当ホテルは、父が事業多角化に当たり、ホテル経営に乗り出したことが始まり。もともと家業を継ぐつもりでしたので、父に背中を押されてこの道に入りました。

仕事のモットーは「初心忘るべからず」。サービス業であるホテルの仕事は24時間365日休みがありません。最初の情熱や気付きを忘れないよう肝に銘じ、常に新鮮な気持ちで取り組んでいます。迷ったときは、武者小路実篤の「この道より我を生かす道なし この道を歩く」という名言に従い、振り返らずに自分を信じて前向きに進むように心がけています。

人の上に立つ立場ではありますが、ホテルの仕事全てを私が管理することは困難です。全従業員に心を込めて上質なサービスを提供してもらうために、「意見を聞く」ことを大切にしています。職種や役職などの立場によりさまざまな見解があるため、私が状況を把握し意見調整をすることで、全員が志を同じくして働ける職場を目指します。

ホテルは装置産業とも言われ、時代の変化とともに最新設備が求められます。アフターコロナの時代では、新しい生活様式の中でお客様に満足していただけるホテルであることが大事。設備投資を進め、心の込もったより良いサービスをお届けすることで、小さくとも光るものがある“プチラグジュアリー”なホテルに進化していきます。

好きなことに一心不乱に取り組んだ経験が 人生の自信につながった

広島大学在学中は、ヨット部の活動に力を入れていました。4年生の夏休みに、クルーザーで沖縄まで1カ月にもわたる航海に挑戦。部として初めてのことで、簡単そうに聞こえるかもしれませんが、小型船舶操縦士免許など幾つもの資格を取得したり、社会人と共に航海術を磨いたり、道のりは険しいものでした。さまざまな人に出会い、困難を乗り越えた末に達成したこの航海は、私の人生の宝となっています。

後輩の皆さんには、「学生生活に失敗はない。好きだと思えることを見つけ、徹底的に取り組むことが大切だ」と伝えたいですね。それが後々人生の糧となり、自信につながります。また、広島大学は中四国ナンバーワンの大学。最近では「私も広大生です」と、声を掛けていただくことが増えました。母校に誇りを持ち、もっと卒業生のネットワークを広げていきたいと思っています。

広島大学を卒業・修了後、各業界で活躍されているOB・OGの方々に学生がインタビュー。現在のお仕事と大学時代を語っていただきました。

工学部 出身

野村 忠秀 さん

東京第一ホテル松山 社長・総支配人

のむら・ただひで／広島大学工学部第四類(建築系)船舶工学1983年卒業。トヨタ自動車株式会社に入社し、1986年に退社。同年、東京第一ホテル松山の運営会社である八紘開発株式会社を設立し、専務取締役就任。1995年より総支配人を兼務。2006年に代表取締役兼総支配人に就任し、現在に至る。

▼広島大学ヨット部から還暦祝いに贈られたキャップ。



Report 学生広報ディレクター

何か一つ、他人に負けない分野において一生懸命やり遂げることは、何年たってもその人の支えとなり、かけがえのない学びを与えてくれると分かりました。そして、人と人のつながりは何よりも大切で、人生において一番の財産になるということに感銘を受けました。私も実りある大学生活を送ろうと思います。

経済学部2年 岸本 彩楓さん



ゆあさ・りな／広島大学総合科学部2017年卒業・大学院総合科学研究科博士課程前期2019年修了。中国新聞社(広島市)に入社、福山市の備後本社で主に警察担当として、事件・事故・火災・裁判の取材・執筆に当たった。2021年4月より本社のヒロシマ平和メディアセンターで原爆・平和担当。



総合科学部・大学院総合科学研究科 出身

湯浅 梨奈 さん

中国新聞社・記者



Report 学生広報ディレクター

取材をさせていただいた日も地域の人を見掛けると気さくに声を掛けると印象的でした。大学時代に積極的に行動したことが現在につながったのではないかとこの話もうなずけました。私も友人や先生方との関係を大切に、興味のあることに恐れず飛び込んでいくつもりです。

総合科学部2年 藤島 華さん



現場に足を運び、記事として発信 社会問題の解決につなげたい

現在、新聞記者として取材と執筆を担当。事件・事故を取材するだけでなく、町の中を歩いてネタを探し、記事として発信しています。この仕事のやりがいは問題を抱える人の話を聞き、記事にすることで社会問題を広く知らせることができる点です。それにより解決に向かえば良いと思います。例えば、不法投棄で荒れてしまっていた福山市の堂々公園。不用品を捨てにくくするために、地元の人々が2008年に彼岸花の球根を植え始めました。これを取材し記事として取り上げると、地元を巻き込んだ継続的な活動が生まれ、不法投棄防止に成功。今では毎年花開くのが楽しみな公園になっています。

私が報道関係の仕事に就こうと思ったのは、在学時代に東日本大震災の被災地を訪問し、実情を目の当たりにしたからです。「性被害に遭っている女性が多いのに、メディアが取り上げてくれない」という話を現地で聞きました。避難所生活を送る弱い立場の被害者はそれを言い出せず、事実は隠されたまま。このことを知り、声なき声を世の中に伝え、再発を防止したいという思いで報道の世界を目指しました。

大学院では土砂災害の被災者の調査研究に取り組みました。その活動の一環で西日本豪雨災害の被災地を歩き、被災体験を聞き取って回りました。災害によって、新たな犠牲者を生まないようにと、それらをまとめた本の出版に携わったことも今の仕事に就くきっかけになったと思います。

大学のプログラムや助成を活用 学生時代の挑戦が今に生きる

学生時代は、機会があれば、国内外を問わず訪問し、その町の人と話し、視野を広げよう意識していました。興味があることは何でもチャレンジしましたね。トラックで被災地への旅、1年間のイギリスへの留学とインターンシップ、社会人と一緒にビジネスを考える産学連携のEDGE(ひろしまアントレプレナープログラム)への参加、マレーシア熱帯雨林調査、SDGs関連の活動でインド訪問、広島市福富町のまちづくりサークルでの活動など、挙げればきりがありません。

広大には留学や起業のための多彩なプログラムや助成制度があり、学生を支援してくれます。私もさまざまな機会に活用させていただきました。チャレンジしたことが今に生きているので、後輩の皆さんには積極的に大学の制度を活用してもらいたいですね。学生の特権は大きいです。学生だから訪問できる場所、会える人、体験できることの可能性は無限にあります。社会人になると、肩書きで評価されることが多くなるような気がします。自分がしたいことをまだ見つけられない人もいるかもしれません。無理に探さなくても、いろいろなことに挑戦しながら模索してみてもいいと思います。きっと広大も応援してくれます。(備後本社勤務中の2021年1月に取材)